

「3・11」以降の「論壇」について

高橋 源一郎

(1) 初めに

報告者は、2011年4月から朝日新聞で「論壇時評」を担当することになった。

奇しくも、同年3月11日、「東日本大震災」が起り、この国に、戦後もっとも大きな変化をもたらすことになると思えた。「論壇時評」の一回目の掲載は4月下旬であり、「震災」に関する最初の反応が様々なメディアに現れ始めた時期であった。以降、報告者は、この社会の起こった変化、そしてそれらに対する反応を、細心の注意で観察し、そこで起こっていることの意味を探り当てようとした。

(2) 「論壇」と「論壇時評」について

ところで、いわゆる「論壇」とは何だろうか。辞書によれば、「論壇」とは「意見を述べるための壇。議論をたたかわせる場所」あるいは「批評家や評論家などの社会。言論界」とされている。この国では、主に、新聞や月刊の言論雑誌と呼ばれるもの（現在の「世界」や「中央公論」や「文藝春秋」、かつての「展望」）の中で書かれる、批評家・評論家・学者たちの政治・社会的発言、メッセージの集合を「論壇」と称している。ただし、現在の「論壇」は「議論をたたかわせる場所」としての機能は、ほとんど持っていない。いわゆる「左翼」「進歩」系の論壇誌・新聞、「右翼」「保守」系の論壇・新聞などに加えて、インターネット系の新しい「論壇」の動きが加速している。そして、それぞれの「論壇」が、他の存在を無視したモノローグに耽っている、というのが、この国の「論壇」が置かれた状況であると、報告者は考えている。その理由は、かつての「論壇」には、冷戦下の「左右」の対立といった状況で、「憲法九条改正・改悪問題」といった、少なくとも、この国にとってアクチュアルと考えられる問題について、議論を交わす必要があったからだ。だが、「戦後」を遠く離れて、「論壇」による議論そのものが、無効になりつつあることは否めない現実なのである。

(3) 「論壇委員会」と「学際」について

報告者が寄稿した朝日新聞「論壇時評」には、一つ、他では見られない特徴がある。それが、時評執筆者の下に置かれている「論壇委員会」だ。ここに、六人の論壇委員が参加している。順に「思想・歴史」を担当する小熊英二、「外交」を担当する酒井啓子、「政治」を担当する菅原琢、「メディア」を担当する濱野智史、「科学」を担当する平川秀幸、「社会」を担当する森達也である。毎月開催される論壇委員会では、それぞれの分野においてこの国を代表する学者（あるいは知識人）が、当該月に発表された論考について、専門の立場から意見を述べる。それと同時に、他のジャンルの専門家からの質問に答える。毎回、四時間時には六時間近くに及ぶ討議を下に、

報告者が「論壇時評」を執筆するのである。現実の「論壇」では、議論が消失してしまったことは指摘した通りだが、この「学際」的性質を持つ論壇委員会の場で行われる討論の中に、報告者は、社会的対話の可能性を感じたことを銘記しておきたい。

(4) 「3・11」以降、話題となった、もしくは時評の対象となった、主な論考

ここでは、「3・11」以降、翌年の10月までに取り上げた、もしくは、重要と考えられる論考を並べ、その中のいくつかについて簡単に内容を紹介してみた。報告者の「論壇時評」は別途、参照されたい。

2011・4月

『戦後』が終わり、『災後』が始まる」御厨貴（中央公論5月号）

（「戦後」ということばが終わり、「災後」の時代が来るといふ、予言の論考。その当否については、まだ答えられないが）

「まさに『原発震災』だ」石橋克彦（世界5月号）

「米軍の災害支援 それでも普天間はいらぬ」（琉球新報社説 3月18日）

「脱原発宣言」城南信用金庫（YouTube）

Twitter・東浩紀

「東北と東京の分断」小熊英二（朝日新聞）

（震災直後の混乱期に、「東北」が、如何に、国策によって翻弄されてきたかを鋭く論じた）

5月

「東日本にソーラーベルト地帯を」孫正義（世界6月号）

「エネルギー政策は転換するしかない」河野太郎（同上）

「日本の大転換」中沢新一（すばる6・7月号）

（震災のもう一つの大きな問題「原発事故」への思想的提言として、もっとも早く書かれたもの）

「原発『核害』と立地自治体」金井利之（世界6月号）

「大震災でみえてきた在日外国人たちの姿」（現代思想5月号）

『ゼロリスク幻想』とソーシャル・リスクコミュニケーションの可能性」山口浩（シノドス・ジャーナル）

「死神に突き飛ばされる」加藤典洋（一冊の本5月号）

6月

「東電の暴走と企業主義的統合」木下武男 (POSSE 11月号)

「現代労働問題の縮図としての原発」今野晴貴 (同上)

『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』開沼博

(博士論文として書かれた、このフクシマの原発と原子カムラをめぐる論考は、他のあらゆる「原発」論を凌駕する、力に溢れたものだった。この本が、「3・11」に合わせたように発刊されたことで、著者を時代の寵児にもした)

「見えないもの、そして見えているのにだれも見えていないもの」鷲田清一 (科学7月号)

「復興への提言～悲惨のなかの希望」東日本大震災復興構想会議

「脱原発こそ国家永続の道」西尾幹二 (WILL 7月号)

(保守派の論客による「脱原発宣言」。原発をめぐるっては、かつての左右の対立そのものが無効化される、典型的な例となった)

「特集・身を守る科学知識」(週刊東洋経済)

宮崎駿のメッセージ (YouTube)

7月

『100000年後の安全』マイケル・マドセン監督 (2009年)

「フクシマ問題は“原子力の危機、にあらざ” ジャック・アタリ (Voice 8月号)

(フランスの原発政策責任者による、重い提言。原発を扱うためには、完全な情報公開、「開かれた民主主義」が必要と主張する。だから、日本では原発は無理、と結論づけた)

『町営原発(株)』設立のすゝめ」日下公人 (同上)

「今何故『スローライフの政治(学)』か」丸山仁 (現代の理論・夏号)

「原子力学会倫理規定」(学会HP)

(学者の良心を示す素晴らしい倫理規定。読んでみると、原子力学会内に、異なった考え方の潮流が混在していることがわかる)

「経済学からみた原子力発電」伊東光晴 (世界8月号)

「梅棹忠夫と3・11」佐倉統 (中央公論8月号)

「国家の見えざる敵」ベネディクト・アンダーソン (現代思想7月号)

8月

「日本の平和運動に未来はあるのか」川崎哲 (世界9月号)

「原発ムラという怪物をなぜ我々は作ってしまったのか」宮台真司・飯田哲也・神保哲生 (創9・10月号)

「放射線リスクの真実」 甲斐倫明・中谷内一也・畝山智香子（中央公論 9月号）

9月

「指差し男」映像

「自由な言葉あってこそ」東京新聞社説（9月20日）

『福島原発事故をめぐる』山本義隆

（科学史の権威による、「原子力」の今日的意味の解釈。「原発」問題に関心を寄せる人たちの必読書になるだろう）

「御用学者がつけられる理由」尾内隆之・本堂毅（科学9月号）

「ソーシャルメディアは東北を再生可能か」津田大介（思想地図β・2）

10月

「いかたの闘いと反原発ニューウェーブの論理」中島眞一郎（現代思想10月号）

「マイノリティと反原発」姜誠（すばる11月号）

「立ち上がった『沈黙の世代』の若者」津山恵子（ウォールストリートジャーナル・電子版）

「全米に広がる格差是正デモの驚くべき組織力」瀧口範子（週刊ダイヤモンド・電子版）

（全米で広がった反格差デモの実態をもっとも早く明らかにした）

ナオミ・クラインの演説（YouTube）

『ケアの社会学』上野千鶴子

11月

『地中海から時代が変わる』か 藤原章生（世界12月号）

「通販生活秋・冬号」

（カタログ雑誌にも関わらず、マスメディアを凌ぐ深い問題意識の下に、「原発」や「震災」について特集を作り上げた）

「SIGHT49号・原発特集」

「原発輸出と脱原発の展望」鈴木真奈美（インパクション182号）

英語版『憤れ！』ステファン・エセル

12月

「のらのら・秋号」（農村漁村文化協会）

『TPP反対の大義』（同上）

『復興の大義 被災者の尊厳を踏みにじる新自由主義的復興論批判』(同上)

『一般意志 2.0』東浩紀

『自由貿易という幻想』E.トッド

(人口学の泰斗による、反 TPP 論。まったく新しい視点を提供している)

「原発利用に倫理的根拠はない」三島憲一訳・解説(世界 1 月号)

「特集・ダメな雇用創出が、震災復興を妨げる？」(POSSE 13 号)

2012 年 1 月

映画『普通に生きる』

「連載・教育のチカラ」瀬川正仁(世界 2 月号)

「民主主義の尊厳を救え！」ユルゲン・ハーバーマス(世界 2 月号)

「人はどんなデモをやってきたか」立花栄(『デモいこ！』収録)

「不安感と幸福感の不思議な関係」鈴木謙介(ブログ)

「なぜ『政治報道』は批判されるのか」杉田敦(「Journalism」)

2 月

『吉本隆明が語る親鸞』吉本隆明

「借金人間製造工場」M.ラッツァラート(現代思想 2 月号)

(現代社会の「負債」「借金」問題を「経済」の枠組みから離れた、極めて広大な歴史的
観点から論じた)

「負債とモラルティ」松村圭一郎(同上)

「家畜をめぐる断章」鈴木文樹(環 48 号)

「社会運動の立ち位置」湯浅誠(世界 3 月号)

「認識の玄界灘をこえて」板垣竜太(インパクション 103 号)

3 月

「(東北)が、はじまりの場所になればいい」山内明美(世界 4 月号)

(東北出身者である著者が、出身者の立場から、「震災」に関する言説を論じた。「当事者」
の視点が鋭い力を持つことを示している)

『人を助けるすごい仕組み』西條剛央

「テクノ・ポピュリズムとテクノ・ファシズムの深い溝」加藤尚武(中央公論 4 月号)

4月

「子どもたちの新しい人権のために」尾木直樹（現代思想4月号）

『子どもの声を社会に』桜井智恵子

（日本で、如何に、子どもの人権が軽視されているかの痛切な指摘）

「国連子どもの権利委員会の最終見解・日本」（外務省HP）

「原発事故 失敗の本質 圧殺された警告」柳田邦男（文芸春秋5月号）

5月

『ネットと愛国』安田浩一

（「ネット」を中心にした、差別的言論の実態を、取材によって明らかにした画期的労作）

「現代思想5月号・特集・大阪」

「大阪はなぜ橋下徹を選んだか」木村政雄（同上）

「釜ヶ崎と『西成特区』構想」生田武志（同上）

「《エンタメ系の北朝鮮》みたいな国の絶望都市（ディストピア）・大阪では、夜中に音楽をかけて踊っているだけで警察が取り締まりに来る」モブ・ノリオ（同上）

「補助金要求の名人たちが作る『公務員の帝国』」篠原章（新潮45・6月号）

「双葉郡民を国民と思っているのですか」井戸川克隆（情況5・6月号）

「大規模災害と科学 原発と科学者の社会的責任」（外岡秀俊「神奈川大学評論」）

6月

「いかに共同性を創造するか」吉田徹（世界7月号）

「誰が橋下を支持しているのか」松谷満（同上）

「『放射性肉』と呼ばれる人びとのたたかい」稲葉奈々子（寄せ場・25号）

「痛ければ『痛い！』と声をあげろ！」ハン・ジヘ、キム・ヨンギョン（インパクション185号）

「広がる生活保護バッシング 河本準一は悪者なのか」島澤諭（ウェッジ・インフィニティ ブログ）

7月

『独立国家のつくりかた』坂口恭平

「思想地図β『日本2.0』」

（練り上げられた「新憲法」を中心に、どのような「日本」が可能であることを思考実験してみせた。若い世代の新しいムーヴメントでもある）

「日本国憲法を口語訳してみた」（2ちゃんねる）

『東京プリズン』赤坂真理

「日本の諸悪の根源は、土地政策と長時間労働です」大本圭野（世界 8 月号）

「バリバラ」ETV 毎週金曜夜 9 時

8 月

「人がデモをする社会」柄谷行人（世界 9 月号）

『「デモ」とは何か』五野井郁夫

『独裁体制から民主主義へ』ジーン・シャープ

『社会を変えるには』小熊英二

（「3・11」以降繰り返された、反原発の国会デモを中心とした新しい社会運動の意味を、世界史の中で探ろうとした労作）

「フライデー・ナイトフィーバーの只中で あるいは傍らで」太田昌国（インパクション 186 号）

「“まともな人”が政治家になれない理由」片山善博、飯尾潤（中央公論 9 月号）

「原発を挟んで広がる『南北格差』」開沼博（「週刊金曜日」7 月 27 日号）

「昭和天皇の決断と責任」御厨隆、伊藤之雄、古川隆久（中央公論 9 月号）

10 月

「福島第一原発観光地化計画」東浩紀（週刊プレイボーイ web）

「米国は尖閣諸島を守ってくれない」孫崎享（週刊ポスト 9 月 7 日号）

（中国・韓国との間で急速に問題化しつつある「領土」に関して、新しい概念を提示している）

『決められない政治』とポピュリズム」杉田敦（世界 10 月号）

「選挙は民意を正しく反映するか」大竹文雄（中央公論 1 月号）

『戦後史の正体』孫崎享

「戦後日本初の海外軍事基地」塚田晋一郎（世界 10 月号）

(5) 中間的な総括

「3・11」以降、様々な言説が溢れた。それらすべてを、ひとことで言い表すことは、もちろん不可能だ。だが、中間報告として、次のようにいうことはできるだろう。

六十年以上を過ぎて、ついに、「戦後」と呼ばれる時代は終わった。だが、これから来る時代が、どのようなものになるのか、はっきりとした見通しで語れる者は誰もいない。わかっているのは、その期間の相当部分が、少なくとも表面上は、なだらかで穏やかだった「時代」が終わり、輝かしい希望を語る事が困難な時代が到来するだろう、ということである。